

## お題『バレンタインデー』

中学から高校2年ごろまで、片思いしてた男の子がいました。学校は違ったけどとても仲が良かったし、勉強もスポーツもできる彼を尊敬していました。5年間も好きだったのに、その子にバレンタインチョコをあげたのはたったの1度だけ。中2のときのことでした。

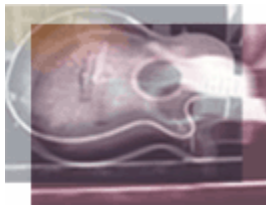


私は中学生ぐらいからテレビはほとんど見なくなって、外の情報はラジオから得ていました。ちょうど技術の授業で小さなラジオを作ったので、その手作りラジオを愛用していました。いつも聞くのはj-waveとinter FM。洋楽の方が好きになり始めたのはこの頃からです。その思い出のバレンタインの日も、私は台所にラジオを持ち込んでチョコを作っていました。作るといっても溶かして固めるだけのどーしようもないものだったけど、当時の私には結構大変な作業。もともと不器用だし、料理も嫌だし、自分から進んで台所に立っていることに我ながら驚いていたくらいでした。

作戦はこう。

チョコは彼だけでなく、他の友達にもみんなにあげる。だから誰も本命が彼とは思わない。義理チョコと見せかけて実は中身は彼のだけが特別！というもの。誰も気づいてくれなくて良かったのです。彼にも別に好きとか言いたくてチョコをあげるわけじゃなかった。ただなんというか、自己満足です。

ラジオからはラブソングが次々と流れて、いろんな人のバレンタインエピソードのFAXが読まれていました。それを聞きながら、彼にどんなメッセージカードを書くか考えました。告白までいかないにしても、なんかちょっと一言添えたくて。で、結局書いた言葉は「いつもありがとう。ところで、義理じゃないよ」でした。今思うと笑える！彼がもうこんなカード捨ててしまっていることを祈るのみ。しかし、当時14歳の彼はこのメッセージを見てどう思っただろう。彼は何も言わなかったなあ。



とにかく、チョコは無事あげることができました。思い出すと本当に不器用で、あんなのならあげないでおく方がよかったと思うぐらいに美味しく無さそうなチョコだったけど、あのころの私は上出来だと思っていました。ホワイトデーには、コンビニで買ってきたようなどこにもあるキャンディーをもらいました。もったいなくて食べられないからずっとしまっておいたけど、高校2年のとき引っ越しのついでに捨てることにしました。

彼とは中学を卒業してから会えなくなって、今も連絡先さえ知りません。でも高校1年の冬、1度だけ電車のなかで偶然あったことがあります。あんなに仲が良かったのに、ひさしぶりにせっかく会えたのに、私は挨拶さえちゃんとできないでさっさと電車を降りてしまったのでした。そのことは長い間後悔していたけど、時間がたつと不思議なもので、そんな私のことが懐かしく思えるようにすらなっていました。この電車での偶然の出来事は、1stアルバム「グレープフルーツ」の中で私が作詞するときの題材にもなったのでした。

彼を思い出す時、同時にあの小さなラジオのことも思い出します。どういうわけか、いつの間になくしてしまったのです。家の中に置いておいたのにどうしてなくしたのか不思議だけど、見つからないのです。私にとって、ラジオは生活に欠かせない大事な道具です。こうしてラジオが大好きになるきっかけとなった、あの小さな手作りラジオ。もう2度と見つからなくても、あれは私の初めての真剣な恋と音楽の思い出を象徴する大切な宝物です。彼は今どんな生活をしてるだろう、もうバスケはやめちゃったのだろうか。今はもっと大事な人がいても、やっぱりバレンタインの度に彼を思い出してしまうのでした。

